

看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴 —学年別および高齢者との出会いの頻度の視点から—

白岩千恵子*¹ 小薮智子*² 竹田恵子*²

要 約

学年別および高齢者との出会いの頻度別に高齢者との関わりの場面における看護学生自身のコミュニケーション・スキルの特徴を明らかにすることを目的に研究を行った。A大学の2年生と3年生計246名を対象に、高齢者とのコミュニケーションで心がけていることを自由記載で、既存の尺度であるENDCOREsとNCSIを無記名の自記式質問紙で調査した。有効回答は2年生35名、3年生57名であった。高齢者とのコミュニケーションで心がけていることについて学年別にみた結果、2年生では「声一話す」、「目一見る」、「話一聞く」の頻度が、3年生では「目一見る」、「目線一合わせる」、「声一話す」の頻度が高かった。ENDCOREsでは、学年別および高齢者との出会いの頻度別ともに6つの下位因子すべてにおいて有意差はみられなかった。NCSIでは、学年別では「聞く態度があることを示すスキル」で2年生よりも3年生ほうが有意に高かった ($p=0.02$)。また高齢者との出会いの頻度別では「言葉にだせない気持ちを聞くスキル」で高齢者との出会いの頻度が高い群のほうが低い群と比べて有意に高かった ($p=0.03$)。A大学の看護学生は、高齢者との出会いの頻度が高い学生においても、「言葉に出せない気持ちを聞くスキル」が高い一方で、先行研究との比較から「表現力」や「自己主張」に課題があることが明らかとなった。そのため今後はアサーティブコミュニケーションを取り入れた教育も行っていく必要があると考える。

1. 緒言

コミュニケーションは人（話し手）と人（受け手）とのメッセージの交換や感情の交流などと表現され、コミュニケーションを円滑に行うために必要となるのがコミュニケーション・スキルである。近年看護教育では、看護を实践する能力のうち、対象者に説明し同意を得る能力や援助的関係を形成する能力である「コミュニケーション・スキル」の育成が重要視されている¹⁾。そのため看護学生には、様々な年代や生活背景をもつ対象者を理解するためのコミュニケーション・スキルが求められる。現在日本は超高齢社会を迎え、看護の対象も高齢者が多くを占めるようになってきた²⁾。特に老年看護学実習では、高齢者の生きてきた時代背景を理解し、長く続けてきた生活行動をふまえた個別的な看護介入が求められる。また、加齢に伴う感覚器や運動機能の低

下、認知機能の低下などによりコミュニケーションがとりづらい高齢者を対象とすることも多く³⁾、看護学生にはより高いコミュニケーション・スキルが求められる。

一方看護学生を取り巻く社会的背景として、核家族化により高齢者と接点が少ない生活環境で育っていることやコミュニケーションツールの多様化などにより、コミュニケーション・スキルを育む機会は減少しているといえる。

看護学生を対象としたコミュニケーション・スキルの先行研究の多くは、学校ごとに学年比較や縦断的調査によって、コミュニケーション・スキルの特徴や教育の課題などについて明らかにしている^{4,5)}ものである。

A大学では老年看護学教育において、2年次に身近な高齢者へのインタビューを行い、3年次には老

*1 介護老人保健施設 サンライフ倉敷 通所リハビリテーション

*2 川崎医療福祉大学 保健看護学部 保健看護学科

(連絡先) 白岩千恵子 〒701-0112 倉敷市下庄700-1

E-mail: kxgsx229@yahoo.co.jp

年看護学実習で高齢者とのコミュニケーションを学ぶ機会がある。インタビューでは、学生は世代間のギャップやコミュニケーションの難しさなどを感じており、老年看護学実習では、特に認知症のある高齢者を前にしたときにどうすればコミュニケーションがとれるのか悩む学生もいた。高齢者とのコミュニケーションに悩む学生のなかには、普段高齢者と接する機会が少ないため、どのように声をかけたらいいのかわからないと感じる学生がいることもわかった。以上のことからA大学における看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴を明らかにし、今後の教育について課題を明らかにすることが必要であると考えた。

そこで今回、学年別および高齢者との出会いの頻度別に高齢者との関わり場面における看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴を明らかにすることを目的に研究を行った。本研究の結果から、コミュニケーション・スキルの向上を目指した効果的な教育方法が検討できると考える。

2. 方法

2.1 調査対象

A大学の看護学生2年生135名と3年生111名の計246名を対象とした。

2.2 調査対象の学習状況

2年生は老年期の理解として高齢者の特徴と生活について学習し、さらに身近な高齢者に対しインタビューを行う課題を行っている。また、2週間の基礎看護学実習で高齢患者を受け持つ学生もいる。

3年生は高齢者の特徴をふまえた看護援助について学習しており、老年看護学実習では高齢患者および施設入所高齢者を対象とした実習を行っている。

2.3 調査方法

2年生と3年生に対し、無記名の自記式質問紙調査を実施した。口頭で調査内容の説明を行い、調査書類一式を配布した。質問紙の回収は、配布後2週間を目途に各自で回収ボックスに投函してもらった。調査期間は2018年3月から4月であった。

2.4 調査内容

調査内容は学年、年齢、性別、家族や身内の高齢者と直接会って話をする頻度、高齢者とのコミュニケーションで心がけていることなどについて尋ねた。また、コミュニケーション・スキルは「コミュニケーション・スキル尺度 (ENDCOREs)」^{6,7)}、「看護場面における人間関係をつくるためのコミュニケーション・スキル (NCSI)」⁸⁾の尺度を用いて測定した。

2.5 分析方法

分析はIBM SPSS Statistics 25を用いて学年別および高齢者との関わり頻度別に記述統計を行った。高齢者との関わり頻度は、「家族や身内の高齢者と直接会って話をする頻度」の質問項目で「ほとんど毎日」、「週に4, 5回」、「週に2, 3回」、「週に1回」と回答した人を関わりが多い群、「年に1~2回」、「ほとんどない」と回答した人を関わりが少ない群として2群に分けて分析した。ENDCOREsおよびNCSIは各下位尺度について学年別および高齢者との関わり頻度別にMann-WhitneyのU検定を行った。高齢者とのコミュニケーションで心がけていることについては、文章を定量的に扱う分析方法であるテキストマイニングの手法を用いた。Text Mining Studio バージョン6.0を用いて学年ごとに係り受け頻度を求めた。係り受けとは、単語単位に分け、元単語がどのような単語に係っているのかを調べるものであり、文章中で意味のつながりのある単語と単語の組み合わせが明らかになることで意味が把握しやすくなる。

ENDCOREsは言語および非言語による直接的なコミュニケーションを適切に行う技能であるコミュニケーションスキル尺度であり、6つの下位スキル「自己統制」「表現力」「解読力」「自己主張」「他者受容」「関係調整」で測定できる。「自己統制」「表現力」「解読力」は基本スキル、「自己主張」「他者受容」「関係調整」は対人スキルに分類される。7件法で「かなり得意」=7点、「得意」=6点、「やや得意」=5点、「ふつう」=4点、「やや苦手」=3点、「苦手」=2点、「かなり苦手」=1点として下位因子ごとに得点を加算し、項目数の4で除して尺度得点を算出した⁹⁾。

NCSIは看護場面における人間関係をつくるためのコミュニケーションスキル尺度であり、8つの下位スキル「相手に合わせた話し方のスキル」「言葉にだせない気持ちを聞くスキル」「好意的な態度を示すスキル」「ゆったりとした態度を示すスキル」「身体接触のスキル」「話題づくりのためのスキル」「聞く態度があることを示すスキル」「初期の関係づくりのためのスキル」で測定できる。「いつもやっている」=5点、「しばしばやっている」=4点、「時折やっている」=3点、「一度はやっている」=2点、「やったことがない」=1点として下位因子ごとに得点を加算して尺度得点を算出した⁸⁾。

2.6 倫理的配慮

調査対象が学生であるため、不利益を被ることのないよう配慮した。具体的には研究への参加は本人の自由意思に基づき行うこと、参加の有無による成

績や今後の評価への影響はないこと、学業上の不利益は一切生じないことを文書と口頭で説明した。また、調査の時期を評価が終了した学年末に実施することで学生の心理的な負担を軽減した。本研究はA大学の倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号17-107）。

3. 結果

246名のうち101名から回答が得られ、質問紙の回収は2年生38名（28.1%）、3年生63名（56.7%）であった。また有効回答は2年生35名（25.9%）、3年生57名（51.4%）であった。

3.1 対象者の属性

対象者の属性を表1に示す。平均年齢±SDは全体20.8±0.8歳、2年生20.1±0.4歳、3年生21.2±0.6歳であった。性別では女性が全体89名（96.7%）、2年生34名（97.1%）、3年生55名（96.5%）を占めていた。

3.2 学年別にみた高齢者とのコミュニケーションで心がけていること

学年別に高齢者とのコミュニケーションで心がけていることについて係り受け頻度を分析した結果（頻度2以上）を表2に示す。頻度の多い順に2年生では「声—話す」が7回、「目—見る」が6回、「話—聞く」が3回であった。3年生では「目—見る」が8回、

「目線—合わせる」が6回、「声—話す」は5回であった。また「表情—みる」は2回であった。学年で特徴的な結果として、頻度が1回ではあるが、2年生では「安心感—持つ」、「共感—うなづく」、「傾聴—共感」などがあつた。また3年生では「あいづち—うつ」、「ジェスチャー—使う」、「スキンシップ—取る」などがあつた。

3.3 学年別にみたコミュニケーション・スキル

学年別にみたコミュニケーション・スキルの結果を表3-1および表3-2に示す。

表3-1のENDCOREsでは6つの下位因子すべてにおいて有意差はみられなかった。表3-2のNCSIでは8つの下位因子のうち、「聞く態度があることを示すスキル」が2年生よりも3年生ほうが有意に高かった（ $p=0.02$ ）。

3.4 高齢者との出会いの頻度別にみたコミュニケーション・スキル

高齢者との出会いの頻度別にみたコミュニケーション・スキルを表4-1および表4-2に示す。表4-1のENDCOREsでは6つの下位因子すべてにおいて有意差はみられなかった。表4-2のNCSIでは8つの下位因子のうち、「言葉にだせない気持ちを聞くスキル」が高齢者との出会いの頻度が高い群のほうが有意に高かった（ $p=0.03$ ）。

表1 対象者の属性 単位：名（ ）はnの%

	全体 n=92	2年 n=35	3年 n=57
年齢（歳）平均±SD	20.8±0.8	20.1±0.4	21.2±0.6
性別 女性	89 (96.7)	34 (97.1)	55 (96.5)
男性	3 (3.3)	1 (2.9)	2 (3.5)

表2 学年別にみた高齢者とのコミュニケーションで心がけていること

2年	係り受け 頻度(回)	3年	頻度2以上
			係り受け 頻度(回)
声—話す	7	目—見る	8
目—見る	6	目線—合わせる	6
話—聞く	3	声—話す	5
言葉—使う	2	目—合わせる	3
相手—話	2	目線—話す	3
相手—話す+したい	2	話—聞く	3
表情—みる	2	言葉—話す	2
		視線—合わせる	2
		笑顔—話す	2
		相手—話	2
		目—合う	2
		目線—合わす	2

表3-1 学年別にみたコミュニケーション・スキル (ENDCOREs)

	平均値±標準偏差		
	2年 n=35	3年 n=57	p値
自己統制	4.6±1.0	4.6±0.7	0.91
表現力	3.9±1.0	3.8±0.9	0.56
解読力	4.7±1.0	4.8±0.8	0.85
自己主張	3.8±1.0	3.7±0.8	0.74
他者受容	5.0±1.1	5.2±0.9	0.27
関係調整	4.7±0.9	4.8±0.8	0.51

Mann-WhitneyのU検定

表3-2 学年別にみた看護場面におけるコミュニケーション・スキル (NCSI)

	平均値±標準偏差		
	2年 n=35	3年 n=57	p値
相手に合わせた話し方のスキル	21.1±2.7	21.1±2.3	0.96
言葉にだせない気持ちを聞くスキル	18.5±3.6	19.7±2.6	0.91
好意的な態度を示すスキル	22.0±3.2	22.5±2.3	0.55
ゆったりとした態度を示すスキル	19.3±3.6	20.2±2.5	0.35
身体接触のスキル	12.3±5.2	13.9±4.3	0.14
話題づくりのためのスキル	19.5±2.9	20.2±2.6	0.14
聞く態度があることを示すスキル	14.7±3.0	16.0±2.9	0.02
初期の関係づくりのためのスキル	22.0±2.5	22.1±2.4	0.89

Mann-WhitneyのU検定

表4-1 高齢者との出会いの頻度別にみたコミュニケーション・スキル (ENDCOREs)

	平均値±標準偏差		
	高い群 n=29	低い群 n=57	p値
自己統制	4.5±0.7	4.7±0.9	0.88
表現力	3.9±0.9	3.8±0.9	0.27
解読力	4.9±0.8	4.7±0.9	0.19
自己主張	3.7±0.9	3.8±0.8	0.47
他者受容	5.3±1.1	5.1±0.9	0.13
関係調整	4.9±0.8	4.7±0.8	0.11

Mann-WhitneyのU検定

表4-2 高齢者との出会いの頻度別にみた看護場面におけるコミュニケーション・スキル (NCSI)

	平均値±標準偏差		
	高い群 n=29	低い群 n=57	p値
相手に合わせた話し方のスキル	21.3±2.7	20.9±2.3	0.37
言葉にだせない気持ちを聞くスキル	20.3±3.2	18.7±2.9	0.03
好意的な態度を示すスキル	22.6±3.1	22.0±2.5	0.20
ゆったりとした態度を示すスキル	20.2±3.2	19.6±2.8	0.28
身体接触のスキル	13.2±4.4	13.4±4.9	0.83
話題づくりのためのスキル	20.4±2.4	19.6±2.8	0.13
聞く態度があることを示すスキル	15.8±3.1	15.4±3.0	0.49
初期の関係づくりのためのスキル	22.4±2.3	21.8±2.6	0.12

Mann-WhitneyのU検定

4. 考察

4.1 高齢者とのコミュニケーションにおいて必要なこと

高齢者とのコミュニケーションで心がけていることについて、「目－見る」、「声－話す」などの具体的なコミュニケーション方法がどちらの学年も上位に挙がっていた。目を見て話すことや声を出してはっきりと話すことは、特に高齢者とのコミュニケーションで必要とされる技術である。高齢者は加齢に伴う聴覚や視覚など身体機能の変化、認知機能の変化などにより、一般的にコミュニケーションがとりづらくなるといわれている³⁾。個々の高齢者の身体機能や認知機能に応じて、相手に伝わるように伝えることが、高齢者とのコミュニケーションを円滑に進める第一歩であるといえる。また学年で特徴がみられたのは、2年生の「安心感－持つ」、「共感－うなずく」、「傾聴－共感」と、3年生の「あいづち－うつ」、「ジェスチャー－使う」、「スキンシップ－取る」などである。2年生はコミュニケーションの方法としてよく指摘される言葉が挙がっている。一方3年生では、例えば話を聞いていることが相手に伝わるようにあいづちをうつ、ジェスチャーを使って身振り手振りで伝える、のように、より具体的なコミュニケーションの方法が挙がっていた。このことから、2年生では知識としてコミュニケーションの方法を把握しているものの、実際の場面でのように表現するかという具体までは挙がっていないことが明らかとなった。A大学では3年次に「ユマニチュード」について講義や学内演習で学習することに加え、実習の中で高齢患者を対象に実践している。〈見る〉〈話す〉〈触れる〉〈立つ〉を4つの柱としたユマニチュードのケア技術のうち、「スキンシップ－取る」は、〈触れる〉に該当する。これらの学習により3年生は目を見て話すだけでなく、触れることでコミュニケーションがより深まることを実感していると考えられる。

4.2 A大学における看護学生のコミュニケーション・スキル

4.2.1 学年によるコミュニケーション・スキルの特徴

ENDCOREsでは有意差はみられなかったことから、一般的なコミュニケーション・スキルについては学年による差はないことが明らかとなった。一方NCSIでは、2年生よりも3年生のほうが「聞く態度があることを示すスキル」が有意に高いことが明らかになった。高齢患者に困っていることがないか尋ねることや、何でも相談してほしいと伝えることは、「聞きたい」、「話してほしい」という気持ちを態度

だけでなく言葉で伝えるものである。高齢患者が抱えている思いやニーズを引き出すスキルは看護師にとって欠くことのできないスキルである¹⁰⁾。高齢者の特徴を踏まえた看護援助を学習し、その知識と技術を活用して老年看護学実習において看護を展開した3年生のほうが、2年生よりも看護師に必要なスキルがより高まったと考えられる。

4.2.2 高齢者との出会いの頻度別にみたコミュニケーション・スキルの特徴

ENDCOREsでは有意差はみられなかったことから、一般的なコミュニケーション・スキルについて、高齢者との出会いの頻度による差はないことが明らかとなった。

藤本⁶⁾の調査で示された一般の大学生とA大学の看護学生を比べると、ENDCOREsの6因子すべてにおいて平均値が低かった。特に自分の気持ちをしぐさや表情で表現する「表現力」や「自己主張」で低い値を示していた。

一方NCSIでは、高齢者との出会いの頻度が多い群のほうが少ない群と比べて「言葉にだせない気持ちを聞くスキル」が有意に高かった。具体的には、高齢者との出会いの頻度が多い群のほうが、言葉だけでなく表情やしぐさで話したことが伝わったのか把握することや、言葉にだせない患者の気持ちを察して言葉にしようとする、話しているときに表情の変化をみることや、その人にとって話しやすい環境を作ることなどのスキルが高いことを示していた。このことから、高齢者との出会いの頻度が多い人は、高齢者の言わんとすることをくみ取り言葉で表現したり、話の内容だけでなくその場の環境にも配慮し行動していることがうかがえた。特に認知症のある高齢者は理解力や判断力が低下しており、不安な気持ちを抱きやすい¹⁰⁾。そのような高齢者を看護する際には、わかりやすい言葉で非言語的メッセージも活用しながらコミュニケーションをとる必要がある。

荒添⁸⁾の調査で示された看護師を対象とした先行研究とA大学の看護学生のNCSIを比べると、看護学生は看護師よりも「身体接触のスキル」の平均値が低かった。「身体接触のスキル」とは、理解していると伝えるために肩に手を置くことや、痛みや苦痛があるときには軽く肩や背中をさするスキルをあらわす。ただ患者に触れるだけでなく、こちらの気持ちを触れることで伝えるというスキルは、A大学看護学生よりも看護師の方が高いことがわかった。

以上のことから、A大学看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴として考えられることは、「表

現力」や「自己主張」という看護学生自身の気持ちを出表するスキルに課題があることである。傾聴や共感の方法や重要性は繰り返し講義や演習で取り組んでおり、まず相手の高齢者の話をしっかりと聞き、訴えや話の内容の意味と意図を理解できるように教育を行ってきた。今回の結果はそれらの成果と考えられる一方で、相手の気持ちや思いを受け止めるだけでなく、自身の気持ちを伝える技術も教育をしていく必要があることが明らかとなった。また、「言葉に出せない気持ちを聞くスキル」は高齢者との出会いの頻度が多い学生の方が高いものの、看護師と比べると低いことが明らかとなった。このことは今後実習などの実践の場面で経験を重ねることで高めていくことができると考えられる。

高齢者との出会いの頻度別では、出会いの頻度の高い学生にスキルが高い項目がみられた。高齢者との出会いの頻度は看護学生の背景や経験に左右されるため、介入することは難しい。しかし高齢者と出会う機会を増やしたり、生活の中で意識して高齢者と関わることで、コミュニケーション・スキルが高まる可能性があると考えられる。

4. 2. 3 今後の教育への示唆

自身の気持ちを相手に正確に伝えるコミュニケーションとして、アサーティブコミュニケーションがある。アサーティブとは相手を尊重し、素直に誠実に対等な立場で自分の主張を相手に伝えることであり、相手の権利を侵害しないで自分の本当に言いたいことを相手にわかるように伝えることである。A大学の看護学生は、高齢者との出会いの頻度が高い学生においても、「言葉に出せない気持ちを聞くスキル」が高い一方で「表現力」や「自己主張」に課題があることが明らかとなった。そのため今後はア

サーティブコミュニケーションを取り入れた教育も行っていく必要があると考える。コミュニケーション・スキルはトレーニングすることで習得できるといわれている¹⁰⁾。ロールプレイなどによりアサーティブコミュニケーションのトレーニングを取り入れることで、「聞き上手」だけでなく「意見交換ができるより良い関係」を身に着けることができると考える。さらに高齢者は加齢に伴う感覚器や運動機能の低下、認知機能の低下がみられるため、学生自身が高齢者の気持ちや考えを正しく理解できているか確認すること、また学生自身の気持ちや考えを一方向的に押し付けていないか確認することもスキルとして必要になってくると考えられる。そのうえで会話のなかであいづちをうつことや、ジェスチャーを使ってわかりやすく相手に伝えること、触れることでこちらの気持ちが正確に高齢者に伝わるように伝えることが必要となってくると考える。

5. 本研究の限界

今回の研究では質問紙の回収率が低く、また限られた学年を対象とした結果であるため、A大学看護学生全体の特徴や課題とは言い難い。また看護学生のコミュニケーション・スキルには老年看護だけでなく、他の科目やこれまでの経験、個々の性格など多様な背景が影響していることから、今回の結果のすべてが老年看護学教育で養ったコミュニケーション・スキルであるとは言い難い。さらに調査時期について、学生の心理的影響に配慮し学年の年度末に実施したが、2年生も基礎看護学実習で高齢患者を受け持った学生もいるため、そのことが結果に影響を及ぼしている可能性も否定できず、本研究の限界であると考えられる。

謝 辞

本研究にご協力くださったA大学の看護学生の皆様に心より感謝いたします。

付 記

本研究は平成29年度川崎医療福祉大学医療福祉研究費の助成を受けて実施した。尚、本研究の内容の一部は、川崎医療福祉大学第25回医療福祉研究報告会および日本看護研究学会中国・四国地方会第32回学術集会にて発表した。

文 献

- 1) 厚生労働省：平成23年2月28日 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書。
<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r985200001316y.html>, 2011. (2020.9.5確認)
- 2) 厚生労働省：平成29年(2017)患者調査の概況。
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/17/index.html>, 2018. (2020.9.5確認)
- 3) 森山祐美：高齢患者とのコミュニケーション。看護実践の科学, 32(12), 14-17, 2007.
- 4) 荒木善光, 戸渡洋子, 中村京子：看護学生のコミュニケーション・スキルとそのスキルを活用する重要度・自信度との関連。熊本保健科学大学研究誌, 16, 95-103, 2019.

- 5) 今留忍, 横森久美子, 谷岸悦子, 長島文子, 安達祐子: 臨地実習における看護学生のコミュニケーション能力の変化—縦断的調査による2年次と3年次との比較—. 東京家政大学研究紀要, 58(2), 5-14, 2018.
- 6) 藤本学: コミュニケーション・スキルの実践的研究に向けた ENDCORE モデルの実証的・概念的検討. パーソナリティ研究, 22, 156-167, 2013.
- 7) 藤本学, 大坊郁夫: コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. パーソナリティ研究, 15, 347-361, 2007.
- 8) 荒添美紀: 看護場面における人間関係をつくるためのコミュニケーション・スキル尺度. 日本看護技術研究学会誌, 4(1), 38-45, 2004.
- 9) 畑中美穂: コミュニケーション. 吉田富二雄, 宮本聡介編, 心理測定尺度集V—個人から社会へ〈自己・対人関係・価値観〉—. 初版, サイエンス社, 東京, 272-277, 2012.
- 10) 篠崎恵美子, 藤井徹也: 看護コミュニケーション—基礎から学ぶスキルとトレーニング—. 初版, 医学書院, 東京, 2015.

(令和2年11月12日受理)

Features of Communication Skills of Nursing Students: From the Perspective of Grade and Frequency of Meeting with the Elderly

Chieko SHIRAIWA, Tomoko KOYABU and Keiko TAKEDA

(Accepted Nov. 12, 2020)

Key words : nursing students, communication skills, gerontological nursing

Abstract

This study aimed to clarify features of communication skills of nursing students with the elderly by grade and frequency of meeting the elderly. An anonymous self-administered questionnaire survey using ENDCORES and NCSI with free description of intentions for communication with the elderly was conducted with 246 second-year and third-year students of University A (valid responses: 35 second graders and 57 third graders). As for intentions for communication with the elderly, frequencies of “talk”, “see”, and “hear” were high in the second grade, while frequencies of “see”, “eye contact,” and “talk” were high in the third grade. ENDCORES showed no significant difference in all 6 subfactors both by grade and by frequency of meeting the elderly. NCSI showed significantly higher “skills to show a hearing attitude” in the third grade than in the second grade ($p=0.02$). The group with high frequency of meeting the elderly had significantly higher “skills to hear unspeakable feelings” than the group with low frequency ($p=0.03$). Nursing students of University A with high frequency of meeting the elderly had high “skills to hear unspeakable feelings,” while comparison with previous studies revealed that “expressiveness” and “self-assertion” were their tasks, suggesting the necessity of education incorporating assertive communication.

Correspondence to : Chieko SHIRAIWA

Geriatric Health Service Facility Sunlife Kurashiki

Kurashiki, 701-0112, Japan

E-mail : kxgsx229@yahoo.co.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.30, No.2, 2021 615–621)